

# ・ボランティア活動における学生の学びと成長

## 障害児の放課後・休日保障活動に関わる学生の意識調査

---

### はじめに

京都には多くの障害児学童クラブや余暇支援に取り組む自主活動がある。多くの学生ボランティアがこれらの活動を支えている。一般学童クラブでの障害児の過ごしも多くは学生たちが担っている。バイト代を保証される活動も少なくないが、彼らの気持ちは全くのボランティア感覚である。この調査結果にも示されているように、若い世代にとって、交通費や食費補助など活動に伴う若干の報酬はあってもいいが、なければいけない、というものでないらしい。むしろ活動の中身が勝負、という感覚である。

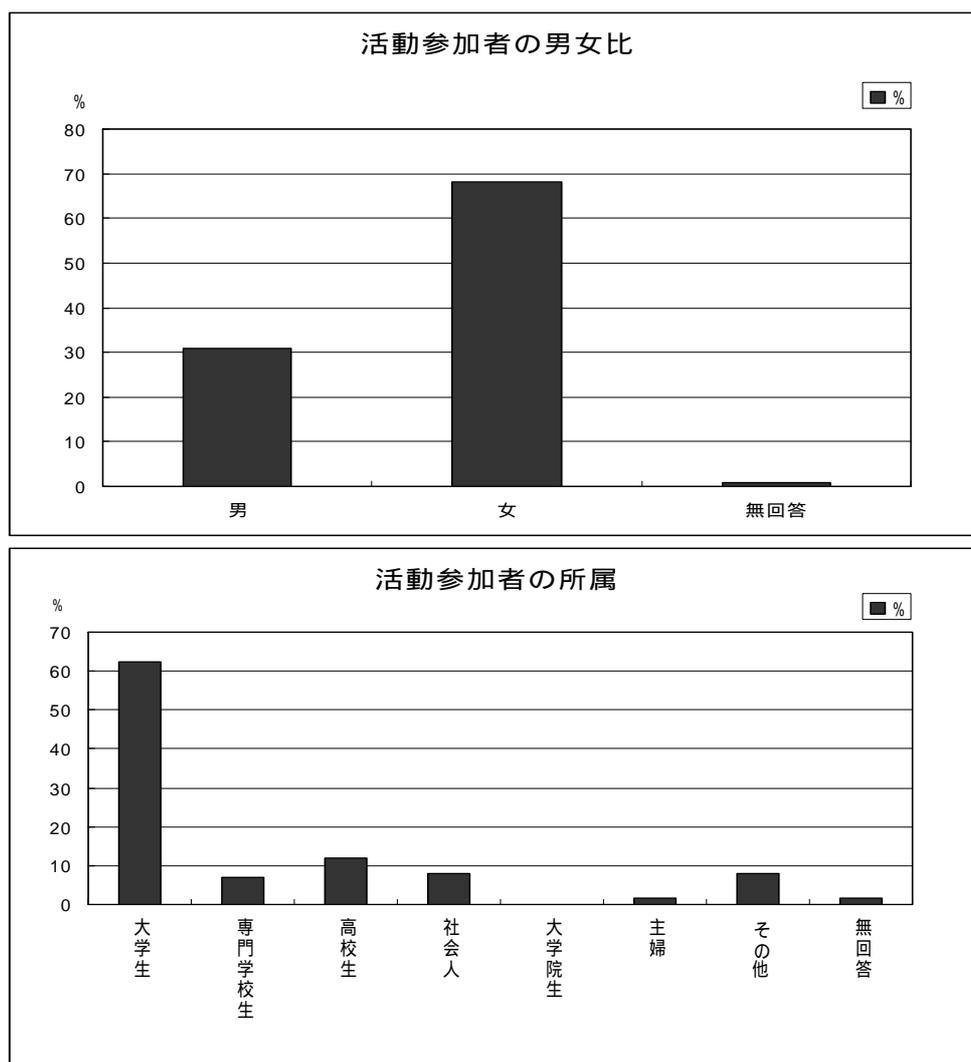
京都府下・市内の学校で学ぶ障害のある子どもたちを対象とする今回の調査を契機に、障害児の放課後保障の活動を支えている多くの学生ボランティアの活動実態や参加動機、学びなどについても調べてみる事にした。調査期間は、放課後・休日調査と同時期の2003年3月から5月にかけて実施した。私たちが把握している障害児学童クラブや余暇支援グループ等約20団体に属性を含めて25項目の調査用紙を郵送し、併せて回収もお願いした。活動に関わっている学生たちの口伝にも広がって最終36団体・116人(有効回答数)からの回答を頂いた。

この学生向けのアンケート調査では、学生自身の活動と現状を振り返る機会にすると共に、学生の立場から障害児の放課後問題にアプローチしてみようと考えた。これからの障害児の放課後・休日ケアはどのようにあるべきだろうか、必要な制度・政策は何なのか。そして、どのようにすればもっと充実した活動を学生の手で担っていけるのか。また、学生たちも子どもたちと一緒に成長していけるのだろうか。彼ら学生の学びや成長をこの活動プログラムはどのように刺激しているのだろうか。アンケート結果を通して考えていきたい。

なお、以下の文中で記している記号「 」は単数回答、「 」は複数回答で得た数字を示している。

## 第1章 活動参加者のプロフィール

放課後活動参加者の60%強が大学生(短大生含む)。その他に高校生、社会人、専門学校生、主婦の方の参加もある。年齢に関わらず多くの人の支えと参加によって子どもたちの放課後活動が成り立っていることがわかる。活動者の性別は、男性が31.0%、女性が68.1%で女性の参加者が多い。年齢では、18~21歳が約7割で一番多く、大学・短期大学・専門学校生など活動者の所属と一致している。

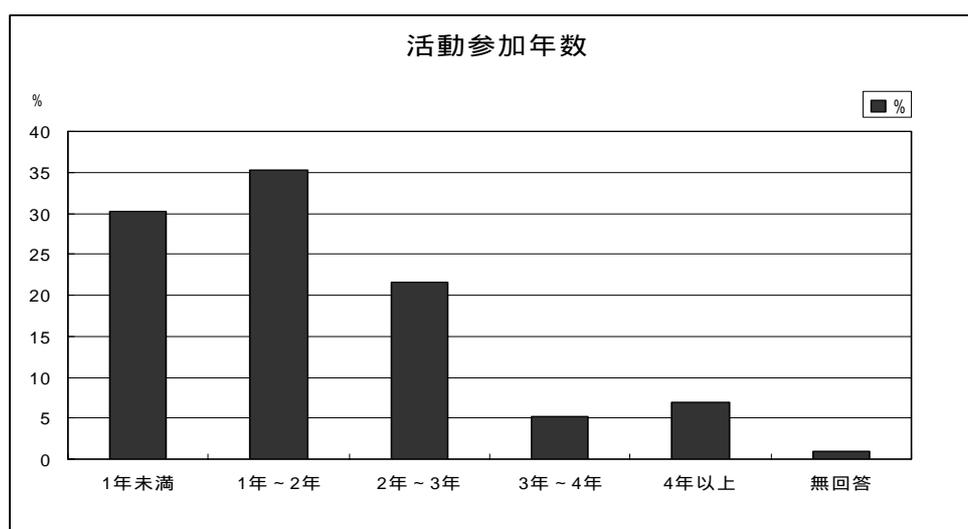


### 1 . 団体への所属の有無 - 団体所属者が約 8 割 -

今回の調査では、事前に私たちが把握していた放課後保障の活動に取り組んでいる団体(約 20 団体)に対しアンケート用紙を配布し回収を依頼する方法をとったため、団体所属者が回答者の 79.1%を占めた。しかし、19%の活動者が団体に所属していないと回答しているなど、地域のボランティアセンターなどで情報を得て活動に参加している人も少なくないことも分かった。

### 2 . 活動への参加年数 - 活動歴 2 年未満の学生が 3 分の 2 -

参加して 1 ~ 2 年経つ人が 35.2%、2 ~ 3 年が 21.6%、3 ~ 4 年が 5.2%、4 年以上が 6.9%、1 年未満が 30.2%になっている。障害児の放課後保障や余暇支援の活動では、新入生の確保やトレーニングといった担い手の再生産の課題が大きいといえる。



### 3 . 活動への参加頻度

- 活動形態により異なるが定期的に参加している -

活動への参加頻度は、活動者の参加団体の活動形態によって様々であるが、月に 1 ~ 2 回参加が 30.2%、障害児学童保育やキャンプ活動など、子ども達の長期休暇に限り行われる活動に数回参加する者が 25%、長期休暇中に行われる活動にほぼ毎日参加する者が 21.6%であり、定期的に放課後活動に参加している様子が伺える。

## 第2章 放課後活動での学びと成長

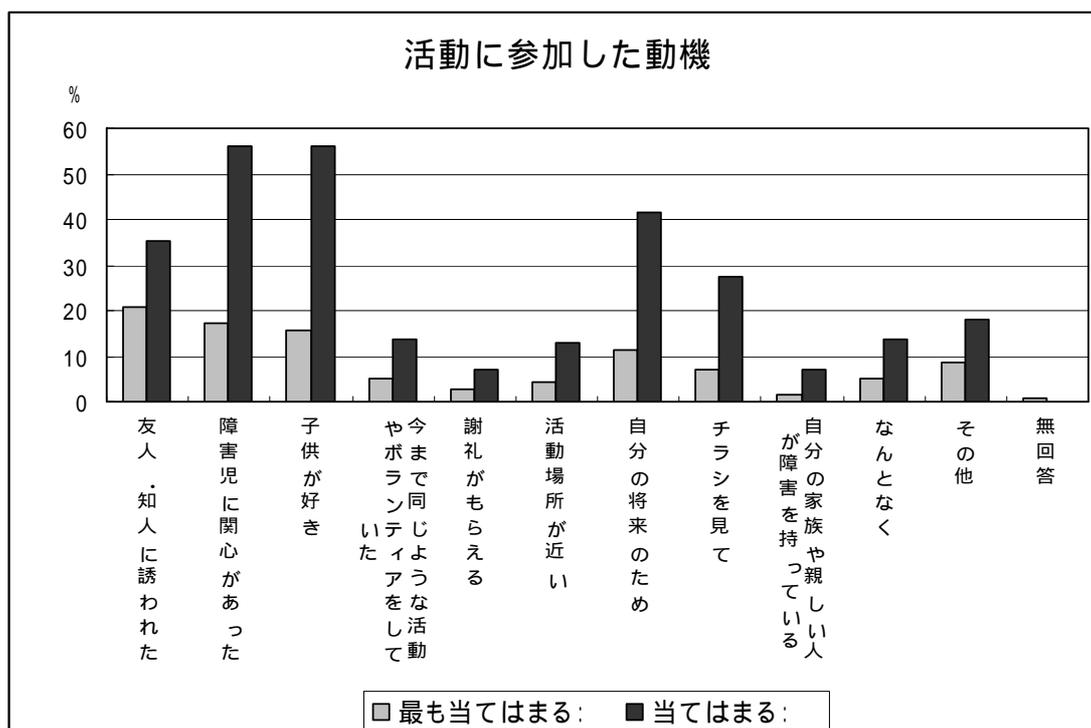
放課後活動に関わる学生の多くは、活動に参加することで新しい発見や経験が出来る、人間関係の広がりが作れる等、放課後活動を魅力に感じていることが分かる。活動に対して辛いと感じることや、時には辞めたいと思うこともあるが、学生はその辛さ以上の放課後活動の有意義さを感じていることが調査から伺える。

### 1. 活動を始めた動機・きっかけ

- 友人・知人など身近なチャンネルが情報源 -

動機は内面でのエネルギーで、きっかけは外的な刺激であるが、相互に作用しながら活動への参加意欲を形成する。彼らの活動の動機やきっかけは、「友人・知人に誘われて参加した」( 20.7%・ 35.3%)、「障害児に関心があった」( 17.2%・ 56.0%)、「子どもが好き」( 15.5%・ 56.0%)、「自分の将来のため」( 11.2%・ 41.4%)が多くを占めた。他にも「チラシを見て」( 6.9%・ 27.6%)、「今まで同じような活動やボランティアをしていた」( 5.2%・ 13.8%)、「何となく」( 5.2%・ 13.8%)という学生もいる。「謝礼がもらえる」( 2.6%・ 2.6%)は少数派だ。「ボランティアや福祉に興味を持っていた」「ボランティアをしている人にあこがれて」「同じ年の学生と多く知り合えそうだから」「自分の視野を広げたくて」などの意見もあった。

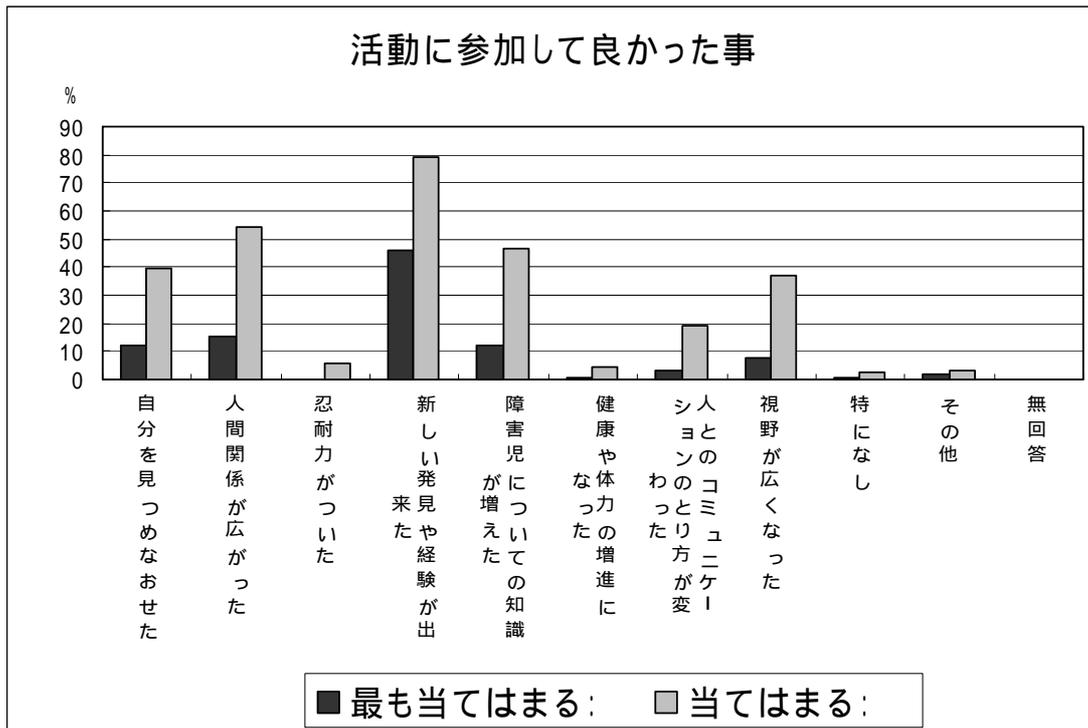
放課後活動は、友人・知人を通じて、また参加者の興味・関心により参加が広がっている。何かのきっかけを求めている学生たちは多い。更に友人の紹介だと、安心して活動に参加できる面もあるのではないだろうか。動機はあってもきっかけがない、きっかけがあっても動機は希薄、という関係では具体的な活動参加には繋がらない。きっかけも動機も必要なのである。チラシやポスター、マスコミを通しての情報提供と同時に、対面的な身近な情報チャンネルが学生たちの活動参加を後押ししているようである。



## 2. 活動に参加して良かった点

- 80%の学生が「新しい発見や経験が出来た」 -

学生は活動に参加することで、「新しい発見や経験が出来た」( 45.7%・79.3%) とする学生が圧倒的に多い。他にも「人間関係が広がった」( 15.5%・54.3%)、「障害児についての知識が増えた」( 12.1%・46.6%)、「自分を見つめ直せた」( 12.1%・39.7%)、「視野が広がった」( 7.8%・37.1%)、「人とのコミュニケーションのとり方が変わった」( 3.4%・19.0%) と活動の中で自己の学びと成長を実感する回答結果になった。「自分の将来を決める決定打となった」という学生もいた。多くの学生が放課後活動に参加することで人とのつながりや新しい経験、発見が出来たとしており、障害児と家族のための活動視してだけでなく自分にとってもプラスになると感じている。



### 3 . 活動に参加して辛かった点

- 子どもたちへの接し方が分からず辛かった -

活動に参加して辛かった点として、「子ども達への接し方が分からなかった」(25.9%)、「学校との両立が難しかった」「自分の時間が持てなくなった」(同 6.9%)とする意見もあるが、辛いと思ったことは「特になし」(19.8%)とする意見もある。その他の意見として「一緒に活動を行うスタッフがなかなか集まらなかった」「障害児と健常児との関係」などを辛かったこととしている。

### 4 . 活動を辞めたいと思ったこと

- 継続している学生でも3割が辞めたいと思った -

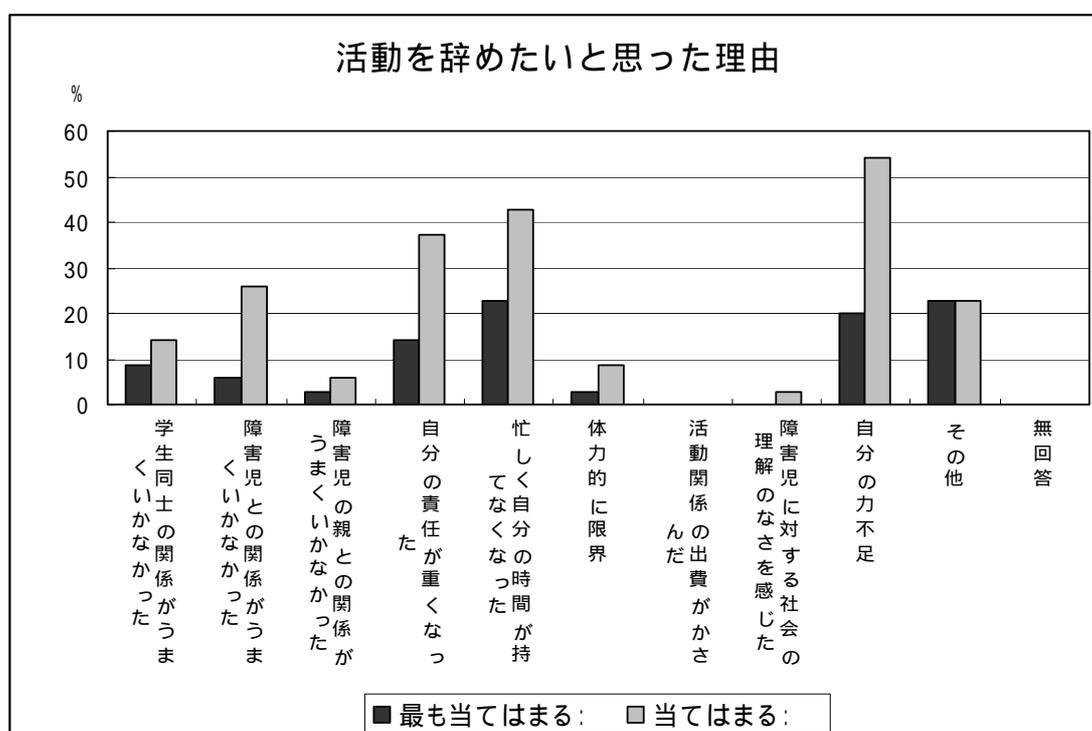
30.2%が活動を辞めたいと思ったことがあるが、69%は思ったことはないとしている。活動を辞めたいと思ったことがあるとしても、継続して活動を続けている理由は放課後活動の魅力ではないだろうか。クロス集計で見ると、活動への参加が週に2回以上又は長期休暇中のほとんど毎日活動している「障害児学童クラブ」などでは、長期的に活動している人ほど活動を辞めたいと思った率が高くなっている。悩みや苦労の数だけ喜びや達成感も大きいという事だろうか。

## 5. 活動を辞めたいと思った理由

- 忙しく時間が持てなくなった・自分の力不足を感じた -

活動を辞めたいと思ったことがある 30.2%のうち、その理由としては「忙しく自分の時間が持てなくなった」( 22.9%・ 42.9% )「自分の力不足を感じた」( 20%・ 54.3% )「自分の責任が重くなった」( 14.3%・ 37.1% )「学生同士の関係がうまくいかなかった」( 8.6%・ 14.3% )「子どもとの関係がうまくいかなかった」( 5.7%・ 25.7% )等である。その他の意見として「やることが多すぎて精神的に追いつめられた」とする意見がある。

放課後活動の参加により、自分の時間が持てなくなったり、自分の力不足や責任の重さに悩み、活動を辞めたいと感じたこともあるが、それでも辞めずに活動を引き続き行っている理由としては、「確かに活動に多くの時間や労力を費やさなければならない面もあるが、それによって得るものの方がはるかに多い」「辛いことよりも楽しいことが多い」「ここを乗り越えれば一步成長出来ると感じたから」など大変なこともあるが、それ以上に子ども達や活動を共にする保護者、仲間から、そして活動そのものから得るものが多いと感じていることが伺える。

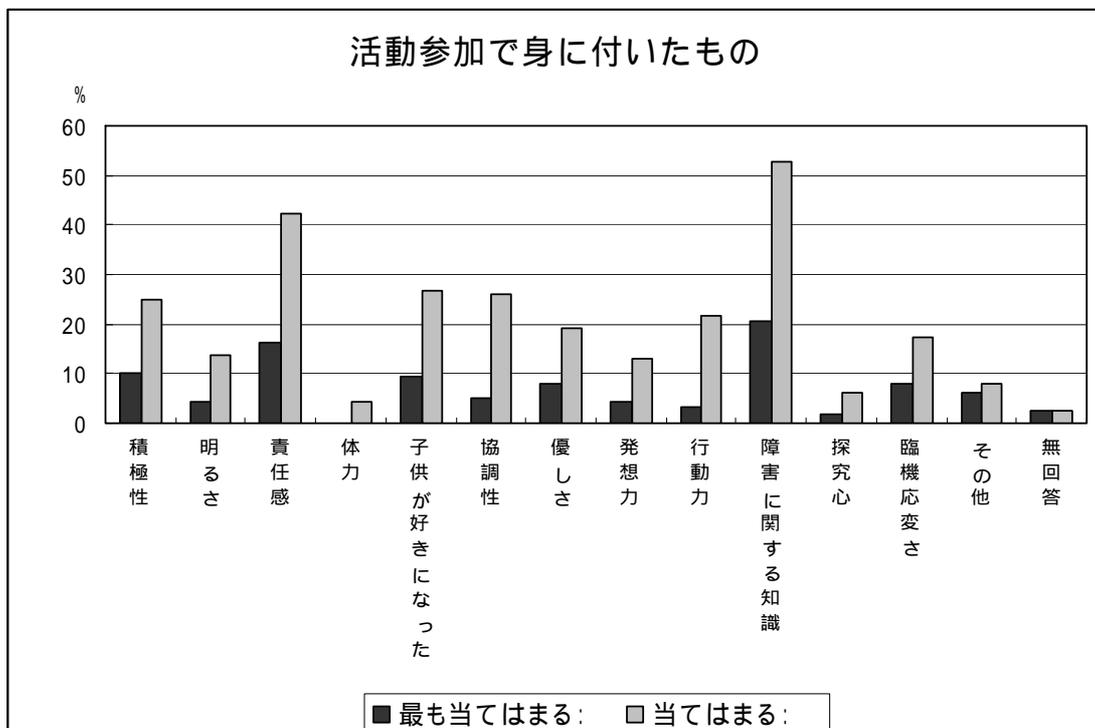


## 6. 活動に参加することで身に付いたもの

- 障害に関する知識が身に付いた -

活動者が活動の参加から身に付いたと感じることは、「障害に関する知識」( 20.7%・ 52.6% ) 「責任感」( 16.4%・ 42.2% ) 「積極性」( 10.3%・ 25% ) 「子どもが好きになった」( 9.5%・ 26.7% ) 「優しさ」( 7.8%・ 19% ) 「臨機応変さ」( 7.8%・ 17.2% ) 他に「協調性」「明るさ」「発想力」「行動力」「探求力」である。その他「子どもや人とのコミュニケーションの取り方」などの意見もあった。

放課後活動に参加する中で、仲間同士で勉強会や学校の先生、保護者からのアドバイスにより子ども達とのかかわり方や障害に関する知識を身に付けていることが伺える。

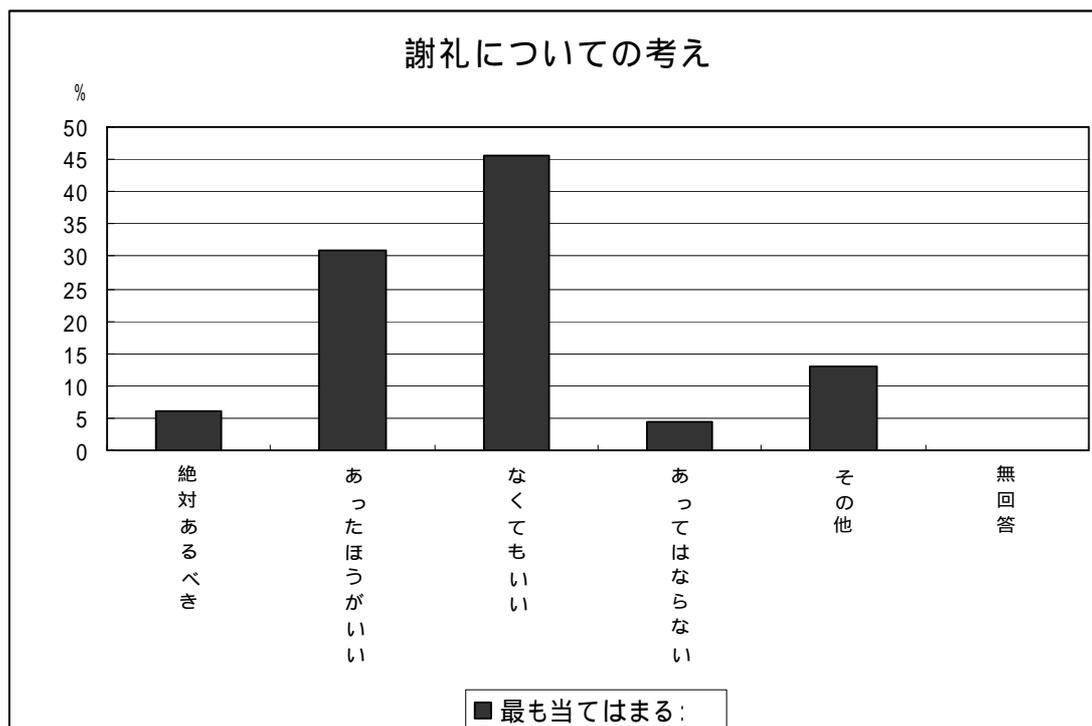


## 7. 謝礼の有無について - 6割が活動により謝礼を得ている -

活動に参加することで、62.1%が謝礼を得ている。謝礼の内容は、活動に関わる費用 (48.6%)、時給として受け取っている (47.2%)、日給として受け取っている (8.3%) である。

## 8 . 謝礼についての考え - なくてもよいとする意見が約5割 -

活動者の謝礼についての考えは、「なくてもいい」( 45.7%)、「あった方がいい」( 31%)、「絶対あるべきだ」( 6%)、あってはならない( 4.3%)である。謝礼を得ることが活動参加の目的ではないが、交通費程度の支給があった方が活動場所までも通え、参加し易いという意見があることが分かった。

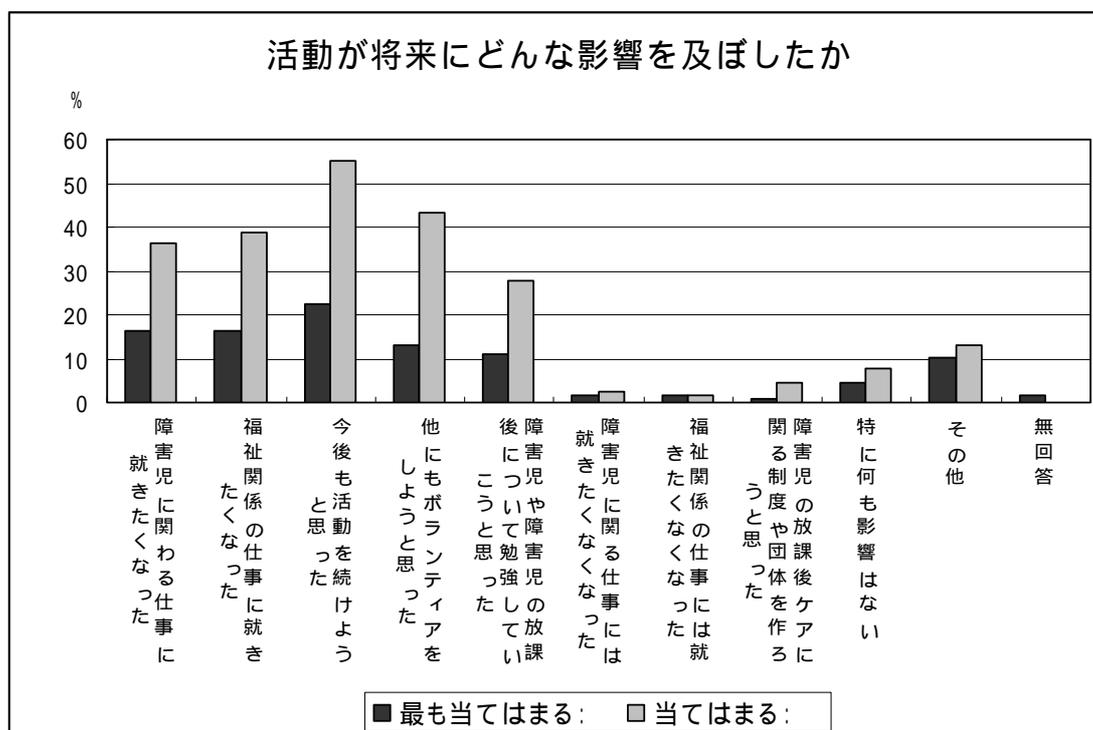


## 9 . 活動が将来にどのような影響を及ぼしたか

- 活動が参加者の将来の展望に何らかの影響を及ぼしている -

放課後活動が参加者の将来にどのような影響を及ぼしたかであるが、「今後もこのような活動を続けていこうと思った」( 22.4%・ 55.2%)、「障害児に関わる仕事に就きたくなった」( 16.4%・ 36.2%)、「福祉関係の仕事に就きたくなった」( 16.4%・ 38.8%)、「他にもボランティアをしようと思った」( 11.2%・ 43.1%)とする意見が多い。その他には「具体的な影響はないが、地に足をつけて物事を考えるようになった」「自分にとって判断の基準がポジティブになった」「自分の短所が見つけた」「自分の中での視野が広がった」「将来、自分の子どもと接するときの手がかりが経験できた」などがある。このように、ほとんどの活動者に良い

影響を及ぼしていることが伺える。ここでも活動者が放課後活動を魅力あるものだと感じていることが分かる。



## 10. 活動に参加して、障害や障害児、障害児の家族についてどのように考えるようになったか（自由記述）

前述までにおいて、放課後活動に参加する学生が参加の中から様々な経験をし、そこから喜びや時には辛さも感じていることが分かった。そのような経験から学生は障害や障害児、障害児の家族についてはどのように考えるようになったのだろうか。101名の学生が自由記述に思いを書いた。以下はその一部である。

- \* 活動に参加する前は確かに偏見があった。しかし、実際に接すると思っていた程意思が通じないわけでもなく、身体が不自由でもなく、自分が重く考えすぎていたことに気づいた。(専門学校生・女)
- \* 今まで知らなかった障害児、者について知り、接することが出来理解が深まった。家族の苦勞、思いを知ることが出来た。機会があれば他の活動にも参加して何か力になれたらと思う。(大学生・男)
- \* 今まで「障害児」というと、どこか構えるようなそんな特別な子どもという意識がどこかにあった。活動を行うことで、「障害」ということよりも、その子らしさや一人の人間としてその子を理解し、その中の一つに「障害」というものがあるという考えに変わってきた。(社会人・女)
- \* 障害児の家族がより心身共に自由に生活を送れる環境づくりが大切だと思った。(その他・女)
- \* 身近に付き合うようになって、より障害児自身へのサポートが大切だと感じた。もっと障害児やその家族にとって生活しやすい環境を周りがサポートしていくことが必要だと思った。(大学生・女)
- \* 今までと障害児、者に対する考え方、見方が絶対的に変わった。障害児の家族についても身近に感じ、考えるようになった。(大学生・女)

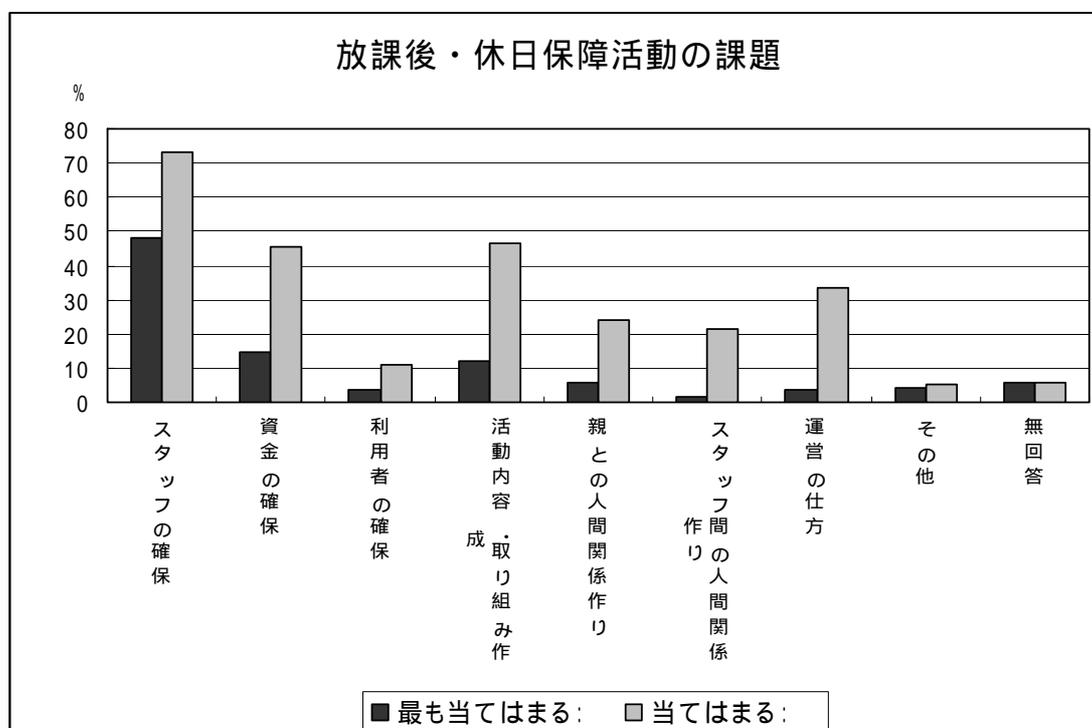
### 第3章 障害児の放課後・休日保障活動についての活動者の考え

現在の活動の課題点としては、約5割の学生が活動を行う上で必要なスタッフの確保を指摘している。そのために学生が出来ることはサポートしていきたいという積極的な意見が見られた。

#### 1. 放課後・休日保障活動の課題 - スタッフの確保を望む声が半数 -

障害児の放課後を支える社会資源の整備状況をもても、ボランティア資源としての学生の力はなお必要である。学生たちもまた放課後活動に一層の充実に力を尽くしたいと考えている。多くの学生が障害のある子どもたちが健常児と同じように放課後や休日を楽しく充実して過ごせるようになって欲しいと考えており、そのための活動を行う上での課題としては「スタッフの確保」(48.3%・73.3%)が最も高い。その他に「活動資金の確保」(14.7%・45.7%)、「活動内容・取り組み作成」の課題(12.1%・

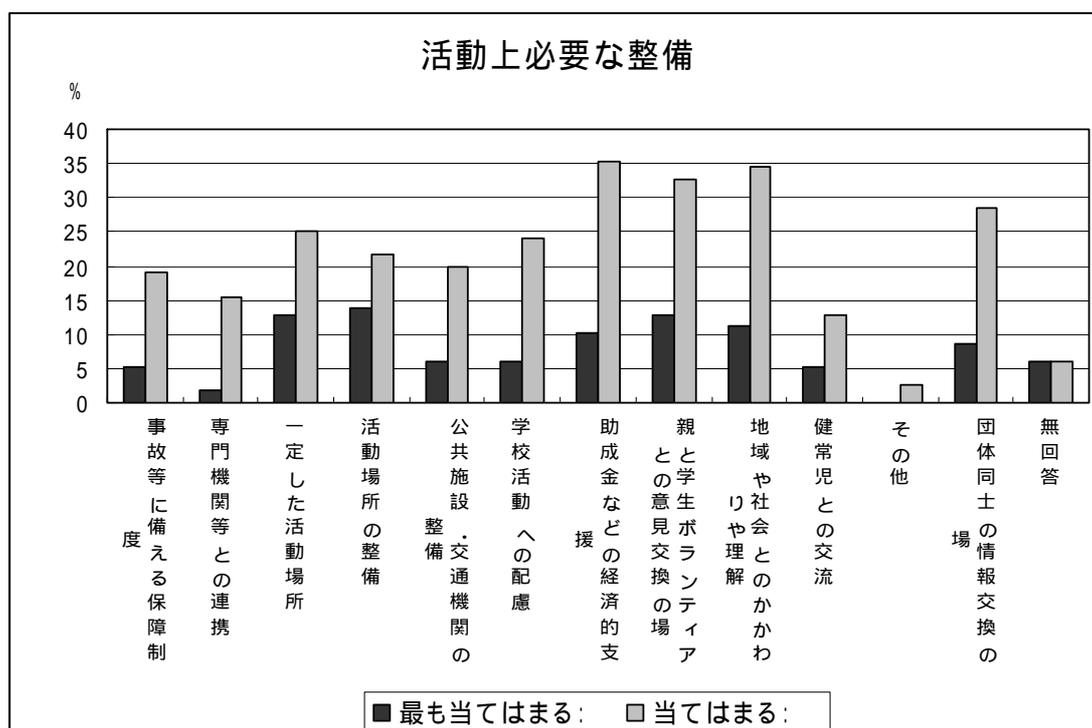
46.6%)「保護者との人間関係作り」( 6%・ 24.1%)「運営の仕方」( 3.4%・ 33.6%)「スタッフ間の人間関係作り」( 1.7%・ 21.6%)などの意見がある。活動を行う上で絶対的に必要なスタッフの確保を望む声が多い。



## 2. 活動上必要な整備 - 活動場所の確保や整備、保護者との話し合いの機会や地域の理解を求める声がある -

活動参加者が求める活動上の整備としては、「活動場所の整備」を望む( 13.8%・ 21.6%)「一定した活動場所」を望む( 12.9%・ 25%)「保護者と学生ボランティアとの意見交換の場」を望む( 12.9%・ 32.8%)「地域や社会とのかかわりや理解」を望む( 11.2%・ 34.5%)「助成金などの経済的支援」を望む( 10.3%・ 35.3%)「団体同士の情報交換の場」を望む( 8.6%・ 28.4%)「公共施設・機関の整備」を望む( 6%・ 19.8%)「学校の活動への配慮」を望む( 6%・ 24.1%)「事故に備える保障制度」を望む( 5.2%・ 19%)「健常児との交流」( 5.2%・ 12.9%)「専門機関との連携」( 1.7%・ 15.5%) その他の意見として「巨大遊具などの遊び場が欲しい」などの意見がある。活動者は、一定した活動場所や活動場所の整備などの環境面での整備や保護者や

他の団体との意見交換の場、地域とのかかわりなどの団体の運営をより良くしていくための環境整備を望んでいることが伺える。クロス集計で見ると、団体所属者で障害児学童保育団体に所属している人は、「一定した活動場所」「経済的支援」を中心に求める声が多く、余暇サークル団体では「活動場所の整備」「保護者とボランティアの意見交換の場」を中心に求める声が多いことが分かる。運営や活動スタイルによって求めているものに有意差があり、それぞれの組織の実態に即した柔軟な支援、解決策が必要であると考えられる。



### 3. これから障害児がどのような放課後・休日を過ごせるようになればいいと思うか（自由記述）

前述の項目では学生が子ども達との関わりだけでなく、放課後活動の運営やその中での役割を通して、これからも活動を良くしていく為の課題や必要な整備について真剣に考えていることが伺えた。では、学生はいつも共に活動している子ども達がこれからどのような放課後や休日を過ごせることを望んでいるのだろうか。105名が自由記述で具体的な思いを綴ってくれた。以下はその一部である。

- \*遊ぶ世界が“限られる”のではなく、もっと自由に選択して、どんどん広がる余暇であってほしい。そのために学生ボランティアは、子どもたちの楽しみそうな場面をサポートしていくべきだ。(大学生・女)
- \*安全で充実した毎日を、健常児と同じような感覚で“当たり前のことを当たり前”に出来るような生活が送れたらいいと思う。(大学生・女)
- \*親とは違う、仲間のような存在であるボランティアや健常児、障害児等さまざまな気の合う人たちが集まり、共に楽しめるような場を作る(普段私たちが遊びに行くように)(社会人・女)
- \*このような活動が気軽に受けられるようになって欲しい。(大学生・男)
- \*障害を持っているからと限定されてしまうのではなく、その子の希望に合う過ごし方が、どこに住んでいても、地域差などなく、充実した放課後・休日が過ごせるようになって欲しい。(大学生・女)
- \*出かけた。何かをしたいときに頼めば必ず来る人がおり、それに対する負担を少なく、利用しやすい環境に整える。(大学生・女)
- \*地域全体が広く理解し、なおかつ積極的にかかわるようになれば、彼らの放課後や休日は変わると思う。(社会人・男)
- \*余暇の過ごした方に悩まなくてもいいようになれば良い。長期休暇も怖くない!みたいな。(社会人・女)
- \*障害を持つけれど、やはり僕たちと同じ子ども。おしゃれもしたいし、同世代の子と遊びたいだろうと思う。その気持ちを理解してあげることが大切だと思います。(高校生・男)